



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 71

Feb. 5, 2020

目次

Report 2

開催報告：第 37 回有機地球化学シンポジウム

長谷川 卓

Invitation 3

第 38 回有機地球化学シンポジウム（2020 年筑波山シンポジウム）ファーストサーキュラー

坂田 将、吉岡 秀佳、金子 雅紀

People 4

高橋、留学するってよ、一英国滞在記ー

高橋 聡

Information 11

日本有機地球化学会 2020 年 年会費のお支払いについて

総会議事録

Announcement 30

2020 年度有機地球化学賞（学術賞）候補者推薦の募集

研究奨励賞（田口賞）2020 年度受賞候補者の募集

ROG36 巻へ論文を投稿しましょう！！

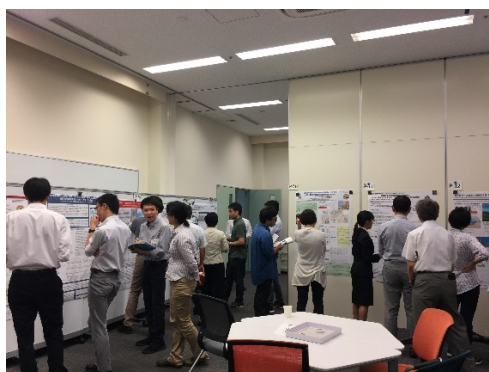
編集後記 33

Report

開催報告：第37回有機地球化学シンポジウム

令和最初のシンポジウムとなった、第37回有機地球化学シンポジウム（2019年金沢シンポジウム）は、金沢大学が主幹となって令和元年8月28、29日に金沢市中心部の石川県政しいのき迎賓館で開催されました。参加者総数は47名でした。口頭20件、ポスター13件の発表があり、非常に活発な議論が展開されました。コンパクトな学術討論会であるが故、高度に専門的な議論やデータの詳細についての突っ込んだ議論が行われ、本シンポジウムの特長を改めて認識することができました。ポスターの学生優秀発表賞には北海道大学の鈴木朝子さんと、金沢大学の吉川亜理紗さんが選ばれました。今後のますますの活躍が期待されます。

会場は旧石川県庁の正面の建物をリニューアルしたもので、その重厚な様子が学会の雰囲気を作り立ててくれました。また北陸新幹線の開業後、初めて金沢をご訪問された会員諸氏も多かったようで、快適な移動をしていただけたのではないのでしょうか。懇親会は28日の夕刻に、金沢21世紀美術館内のカフェで開催されました。美術館内だけあって雰囲気も良く、一味違った金沢の夕べを楽しんでいただけたと思います。学会をサポートしてくださった役員諸氏、金沢大の学生、ポスドク諸氏にあたためて感謝いたします。（金沢大学・長谷川卓）



活発な議論が行われた口頭発表会場とポスター発表会場



会場となった石川県政しいのき迎賓館エントランスにて



懇親会会場にて：鈴木会長の挨拶

Invitation

今回の第 38 回有機地球化学シンポジウムは、筑波山で開催致します。

第 38 回有機地球化学シンポジウム（筑波山シンポジウム）

日程：2020 年 9 月 2 日（水）～9 月 4 日（金）

場所：筑波山ホテル青木屋（茨城県つくば市）

＊9 月 2 日に理事会、3・4 日のワークショップを開催の予定。3 日夕方に総会を予定しています。

今回の第 38 回有機地球化学シンポジウムは、つくばエクスプレスが開業し、都心から 1 時間以内でアクセスが可能になった「ほどよい田舎」のつくば市で開催されます。2002 年の第 20 回シンポジウム以来、18 年ぶりとなります。前回のシンポジウムは産業技術総合研究所の中で行いましたが、今回は研究学園都市から少し足を伸ばして、筑波山の中腹、筑波山神社（拝殿）参道沿いのホテル青木屋で開催する予定です。湯河原シンポジウム（2014 年）や箕面シンポジウム（2016 年）と同じような合宿形式で、若手～ベテランが一同に会して、アットホームな雰囲気の中で研究発表・議論をしていただけるように計画を進めております。

筑波山は日本百名山の一つで、筑波嶺や紫峰とも呼ばれる茨城県のシンボリック存在です。男体山（標高 871m）と女体山（877m）からなる双耳峰で、その美しい姿から日本百景にも選ばれています。隆起した花崗岩の侵食によってできた山で、見た目は独立峰でも実際は八溝山地の南端（筑波山塊）となっています。古来、筑波山は神として崇められてきた神域で万葉集にも歌われています。

両山頂には筑波山神社の本殿があり、男体山はイザナギノミコト、女体山はイザナミノミコトが祀られています。筑波山中腹からケーブルカーで登れば、暑い季節でも勞せず両山頂に辿り着くことができます。山頂からの眺めは特に見事で関東平野を一望できます。週末には有名な筑波山ガマの油売りの口上が境内（隨身門の手前）で披露され観光に一役買っています。

都道府県別魅力度が 7 年連続最下位の茨城ですが、実は全国有数の農産県です。はくさい、ピーマン、れんこん、チンゲンサイ、メロン、くりは産出額が全国一。コメの生産量も多く（7 位）、筑波山麓産コシヒカリの北条米は有名ブランドです。酒蔵も多く（8 位）、鬼怒川水系・利根川水系・筑波山水系など五つの水系が豊富な水を運び、旨い酒を作りだしています。自然豊かな環境で茨城の隠れた魅力に触れながら、先端的、独創的、分野横断的な研究成果を発表していただき、また活発で建設的な議論を繰り広げていただきますように、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。（世話人：坂田 将、吉岡秀佳、金子雅紀）



筑波山の女体山山頂からのパノラマ展望 筑波神社の本殿（右）と男体山（中央）が見える

People

今回は、東京大学の高橋聡さんにイギリスでの研究活動についてご寄稿いただきました。

「高橋、留学するってよ、一英国滞在記ー」

東京大学理学系研究科 高橋聡

1. はじめに

高橋聡と申します。有機地球化学会ニュースレターに寄稿をさせて頂くのは2回目となります。前回(2013年)は、私が博士号を取得し大学に勤め始めたときのことを書かせていただきました。現在も、古生代ー中生代時期の堆積岩類を対象にした古環境史復元の研究を続けております。その新しい展開として、今回の記事では昨年まで行ってきたイギリスでの在外活動について紹介したいと思います。

2. 留学のきっかけと準備

博士号取得から月日が経ち、「いつかは挑戦したい」とぼんやりとした留学への希望はありましたが、それを実現するには何かをきっかけに構想を具体化する必要がありました。そんなとき、転機が訪れます。2018年の春、にイギリスリーズ大学の Paul Wignall 教授からメールが来ました(図1)。その内容は、ヨーロッパ地球科学連合(EGU)の受賞講演用の発表スライドに加えたので、私が以前に公表した論文の図を送ってこないかということです。Paulさんは、地質時代の大量絶滅の研究をリードする大御所研究者です。Paulさんを含めリーズ大学の古環境分野の研究者とは、2010年のGoldschmidtの会場で対面して以来、論文や査読のやり取りはあったものの直接会うことはありませんでした。そのような状況下でも私のことを覚えていて、ヨーロッパ諸国の研究者の注目が集まる会場で研究を紹介してもらえたことは大変喜ばしいことでした。同年6月に、仙台の東北大学にて国際研究集会(IGCP630)が開催されました。先のPaulさんのEGUでの講演が宣伝になったようで、この学会時期に合わせて当時リーズ大学に所属していた若手研究者 Martin Schobbenさんから共同研究の問い合わせがありました。リーズ大学で行われている地球化学分析研究の対象候補として、深海域の大量絶滅期を記録した岩手県のペルム紀ー三畳紀境界層の露頭を見学させて欲しいということです。その露頭は、私たちのグループが長年研究して確立してきたもので、これまでも海外から一方的にこの露頭のサンプルを送って欲しいという申し出はありましたが、実際に露頭を見学したいというMartinさんの申し出は好意的なものに思えました。Martinさんと仙台の学会会場で会い、さらにそれにWignall研究室出身のDavid Bondさんも加わり、私たちはその後の巡検までを通して情報交流を深めていきました。そのなかで、私から「共同研究を進めるなら自分もイギリスに行って参加してもいいかな？」という話をしました。それに対してMartinさんから、『ちょうどその年の夏にリーズ大学のSimon Poulton教授が日本に来るので、受入の相談を直接してはどうか』と教えてくれました。さて、このPoulton教授も地球化学分野では高名な研究者のひとりです。鉄・硫黄・有機炭素の地球化学的振る舞いと溶存酸素環境に関する重要な論文が多数あり、私も博士研究をまとめる際などに何度も彼の文

献を読んでいたので、強い印象がありました。8月、Simon Poulton さんが東京にやってきました。東工大の客員として招待されていたそうです。東京大学のキャンパスにて、Simon さんに私が準備した研究計画案の話を聞いてもらい、またリーズ大学での研究の進展についてのセミナーをして頂きました。



図1：留学のきっかけをつくった、イギリスの研究者との交流の概念図。注意：実際はSNSを使っていたわけではありません。

かくして、2018年のわずか数ヶ月の間にリーズ大学関係者との交流が進み、留学のイメージを具体化するに至りました。その後は、留学のための助成金応募に着手しました。夏から冬時期までの間に3つの助成金公募（学術振興会の二国間交流事業、財団基金（山田財団）、東京大学の若手研究者派遣事業の募集（若手研究者の国際展開事業））に応募しました。応募結果は2勝1敗、その中で援助期間の条件がよいものとして東京大学の派遣事業を選ばせて頂きました。留学するための渡航費・滞在費を定額で支給される、派遣元の組織にも派遣期間中の欠員を埋める人件費を支援するという内容でしたが、実際は、外国でも使える研究費と在外活動先で利用するオフィス・実験室のスペースチャージに充てる予算が確保できると好ましいです。

助成金採択の喜びもつかの間、留学前に準備すべきことはたくさんあります。重要なことは大学の仕事の引き継ぎです。1年の不在の間、他の教員の方に担当してもらえるように実習や委員の仕事内容を整理して引き渡しておかなければなりません。その引き継ぎを2019年度の夏セメスターをかけて行うことにしました。もうひとつ重要なことがあります。それは、長期滞在ビザの取得です。イギリスに日本人が滞在する場合、期間が6ヶ月以上のときはビザを取得しておく必要があります。このビザの取得には長い期間（1ヶ月くらい）を要しました。留学の詳細情報や受入先の確約、帰国するだけの資金があるかなどを証明するため、各種書類を揃えて審査を受けるのです。給与や銀行口座の書類を自分で和文英訳したものは認められません。専門の業者に英文翻訳を依頼し、その翻訳内容が確かであるという証明も発行してもらう必要があります。

3. リーズ大学での生活

留学先としたリーズは、イギリスの主要都市第4位くらいの都市だそうです。中心街に石造りの伝統的な建物と近代的な建築とが混合して建ち並び、市街地を離れると、羊や牛が歩く牧草地が広がっています。私にとっては、都市機能と緑がほどよくバランスのとれたよい環境に思えました(図2)。



図 2：リーズの市街地の街並み。

リーズでの在外活動は 2019 年の 8 月中旬から始まりました。大学に出向く初日は、Martin さんに案内してもらいました、彼から携帯電話越しに聞く待ち合わせ場所が聞き取れず、何とも不安要素が多いスタートでした。居室はポスドク・博士課程学生が集まる大部屋で、その一角に机を貸してもらいました。同室のメンバーは実に国際色豊かです。私の滞在期間中の出入りも含めると、イギリス人 4 人、スコットランド人 2 人、中国人 2 人、ドイツ人 2 人、イラン人 1 人、イタリア人 1 人、アメリカ人 1 人、カナダ人 1 人、そして日本人 1 人（私）という構成です。共同研究を誘ってくれた Martin さんは、母国オランダでポジションを得て帰国してしまったので、私を知る人は同室には誰もいなく、ゼロからの交友のスタートです。部屋のメンバーは、朝それぞれの時間に仕事をはじめ、毎日決まってコミュニティーラウンジに集合し、雑談をしながらお昼ご飯を食べるのが慣例です。ご想像に難くなく、私はこの雑談になかなか入っていきませんでした。左右から聞こえてくるさまざまなアクセントの会話が聞き取れていないからです。雑談中に全体的外れな返答をしてしまったり笑われることもしばしばです。しかし、毎日顔をあわせていけば、徐々にそれぞれの人の背景や趣味などの情報が分かってきます。そうなれば、多少話が聞き取れなくとも何の話をしているのか、だいたい想像が付くようになります。金曜日の夕方は、このラウンジが皆でビールを飲む会場となります。お酒が入ると、皆早口になるのでさらに話はつかみづらくなります。しかし、こちらもお酒が入っているので会話に入る勇気が増します。勇気を出して飲み会の輪の中に入っていくと、私は 2 次会や 3 次会まで残ってお酒を飲んでいる希少なアジア人として顔を覚えられていくことになりました。ほかに、仕事終わりのサッカー（図 3）、ヨークシャーでの地質調査、ホームパーティなどの仲間に入れてもらえて本当によかったです。



図 3：リーズ大学のサッカー仲間との集合写真。

在外活動中は、日本から持参した岩石サンプルを化学分析することと論文を執筆することに時間を使いました。執筆に関しては、Paul さんをはじめ私の研究をよく知る研究者と普段から話をする事ができ、疑問がすぐに解決する、アイデアが浮かぶなど、得るものが多くて良かったです。分析作業に関してもよい体験をすることができました。作業を行ったリーズ大学の地球環境学科 (Earth and Environment) の地球化学実験室は、通称“Cohen Lab”と呼ばれています。この実験室はとてもよく整備された実験環境でした。鉄や硫黄、リンの溶液分画抽出作業 (Sequence extraction) に長けており、そのための効率や動線を意識した設備とマニュアルが完備され、複数の技術者が付いていてサポート体制が万全です。優れた実験環境を頼りに、外来の利用者も多数訪れていました。私はその実験室を利用して、主に鉄とリンの分画抽出をさせてもらいました。化学処理の作業過程、試薬の濃度計算等を英語で考えるのが大変でした。例えば、実験の手順を教えてもらっている最中にも、

Martin 『“パイペット” とって』

私「！？、ああピペット(pipet)のことか・・・」

Lewis 『“クリシボー”を準備しよう』

私「？？？、るつぼ (crucible) のことか・・・」

など、相手に話してもらっていても私が理解するのに時間がかかってしまいます。また、私の口からとっさに出てしまうカタカナ言葉が、やっかいな誤解を生むこともあります。例えば、pH のことを“ペーハー”と呼ぶ、ある体積に溶液を希釈 (dilute) するときに“メスアップ”と言ったりすると、相手に私が意図したことが伝わっていませんでした。ちなみに、“ペーハー”はドイツ語読みで英語ではありません。“メスアップ”と聞いて英語で連想するのは“mess up (散らかす)”です。フラスコにたっぷり試薬を入れて、“さあ、散らかそうぜっ”と言っている訳ですので、私はかなり危険な東洋人です。

セミナーで話すことは、自分の研究について知ってもらえる良い機会になりました。英語が母国語以外の方が話すとなるとどうしても大勢の集客は望めませんが、それまでの交流を通して私の研究活動を知った人から質問やコメントをしてもらえたのが良かったです。私が参加していた地球化学グループのセミナーでは、学生・研究者の他にも技術者の方々が参加しています。セミナーの後で、ランチタイムや実験中に技官さんから感想やアドバイスをもらえるというのも良い環境でした。ちなみに、セミナーでは技術者の方から機器の使用例や導入を希望する新製品の紹介などの発表があることもあり、興味深く聞かせてもらいました。

叱られたこともあります。それは、時間外の実験作業に関してです。よく聞く話だとは思いますが、次のマシンタイムに間に合わせるため、学会の発表に間に合わせるために、夕方5時過ぎ、週末土曜日に作業をして何とか分析の前処理を終わらせようと考えたのです。時間外に実験室で作業をしていたことが表立ってしまった時、私はうまくごまかす語彙力もなく、時間外に試薬を扱う作業は禁止されていることをみっちり技術室で聞くことになりました。実験室に配備された作業手順マニュアルには、それぞれの作業を夕方までに終わらせるためには何時から始めるべきか目安の時間も書いてあります。分析作業をきちんと計画的に進めることは心身ともに安全な研究活動を行うためには重要です、身に染みて教わりました。

4. リーズでのホームステイ生活

私は、海外で生活をするなら日本人ひとりで別の国の人に囲まれて過ごしたいと思っていました。リーズ大学での研究環境はまさしくそれです。では住むところはどだったかというところ、これも刺激的で充実したものになりました。イギリスでの住居を探すにあたって、出国ギリギリまで大学の担当実習が続いていたので、じっくり候補を吟味する余裕もなく、試しにホームステイを探すイギリスの Web Page に滞在先を探している旨を書き込みしてみました。すると、ほどなく一通のメールが届きました。差出人は、長く留学生を受け入れてきたベテランホストマザーだそうで、『大学に通う学生（研究者でも）を歓迎する、家からリーズ大学へのアクセスも良い』とありました。なかなか良さそうな条件だったので、部屋を予約させてもらうことにしました。あとで聞くと、以前世話した日本人留学生が礼儀正しくて印象がよかったので、日本人の受入を探していたのだそうです。私は、先人の日本人留学生の良い行いに感謝しなければなりません。

東京からリーズに着き、情報通りの住所にやってきたところ、ホストマザー Lynne さんの大きな家に迎えられました。Lynne さんは御年 70 歳近く、自宅兼会社経営に使っていた家を、今はシェアハウスにして暮らしています。一緒にホームステイをしていたのはスペイン、フランス、リトアニア、トルコ出身の面々でした。皆、留学生ではなくリーズで職をもって働いています。さらに、本宅から庭を挟んで複数のゲストルームがあり、そこには、イタリア、ドイツ、サウジアラビア、中国などから英語の語学学校に通う留学生が短期滞在していきます。このような同居人と共に、5 人から多いときは 15 人で共同生活をするようになりました（図 4）。



図 4: リーズで過ごしたホームステイの夕食の様子。

朝食と昼食は自由、夜 7 時の夕食は皆で集まるというのが家のルールです。毎晩、大きなオープンで調理された暖かい料理を毎晩準備してもらえました。夕飯を囲みながら、『学校はどうか?』『友達はできたのか?』『このご飯おいしいね』といったような会話が進みます。家に帰ると暖かい食卓が毎日待っている、話す相手がいるということは、留学期間中の私を支える重要な要素であったように思います。また、様々な出身国の人がいるので、欧州国の経済事情や難民問題についてなど、日本の報道ではどこか遠い国の話になりがちな話をもっと具体的に聞くことになりました。（直接体験した方から聞くと何ともいえない心情になります。）

ホームステイの仲間に溶け込むコツは、食後の片付けなどの家事を一緒に手伝うことだったと思います。また、Lynne さんのリクエストもあって、時々寿司やラーメンなどの日本食を作りました。皆の信頼と胃袋をつかむため、街のレストランやファーストフード店よりも本格的な日本の味のものを作ったと自負しています。ところが、その様子を見て中東出身の留学生の中には戸惑いを感じた人もいたようです。出身国の文化の違いですが、男性が炊事や洗濯などの家事をするということにびっくりしている様子なのです。別の文化圏になじんで学ぶことも重要ですので、身の回りのことを自分ですること、例えば電子レンジや洗濯機の使い方などを皆で協力して教え合うことになりました。しかし、結局環境変化になじめずに学校に行けなかった留学生もいました。洗濯物や食器を誰かに片付けてもらって当然という態度を叱られた後は、ホストファミリーとの夕食にも現れず、（おそらく）部屋でスマートフォンのゲームをしているだけで過ごしている様子なのです。そんな生活で、何のための留学なのでしょう。どうも留学生の中

には、他国に来る目的を、ピザのデリバリーを頼んでみたい、お酒（+アルファ）をたしなんでみたいということに重きを置いて、語学や文化の交流は二の次にしている人もいます。Lynneさんは素行が悪い学生には大変厳しく、容赦なく追い出してしまいました。家で何かそのような問題が起きたときは、夜に“年長者グループ”で集まってスコッチを飲んで喋って発散しました。私は追い出されることなく、何とかスコッチを飲む側に加わって良かったです。ホームステイの仲間以外にも、Lynneさんの友人や家族、民泊で訪れるゲストと交流することで大学以外の生活を楽しく過ごすことができました。ハロウィンで顔を彫ったかぼちゃ、クリスマスのターキー、イースターエッグ、全てが忘れられない思い出です。

5. お世話になった Simon Poulton 教授

留学の受入をして頂いた Simon Poulton 教授には様々な場面でお世話になりました。1年のなかで時間を共に過ごすことが多く、著書を読んでいただいただけではうかがい知れない人柄を知ることができ、共感できることや見習いたいこと、多くの刺激を受けました。Simonさんの日常からは、論文の執筆に対する強いこだわりが感じられました。執筆・推敲に多くの時間を割くということは、時折主要学会に多くは顔を出せなくなるということにもなりますが、自分達の中で確立した考察と結論に至ったときのみ学会で新しい話をするというのは納得のいく理由だと思います。私たちの共通の話題は、肩こり・腰痛とお酒でした。Simonさんの居室のガラス戸の奥を覗くと、彼はいつも長身をかがめてかじりつくようにパソコンの画面の前で原稿を打ち、印刷した原稿を修正することを繰り返しています。仕事が一段落すると、若手を誘って昼食に出ようと言ってくれます。場所は生協の食堂ではなく、少し小洒落たパブやレストランです。そこで Simonさんは決まって赤ワインをオーダーします。午後もあるお昼時にお酒を飲むなんて日本では信じられないことでしょう。私もワインに挑戦してみましたが、やはりその日の午後は眠くなってしまったので、以降昼食時はコーラを頼むことで我慢するようにしました。それでも赤ワインが入った後の Simonさんの仕事には何の支障も感じられません。集中する時間とリラックスする時間にメリハリを付けるというのは一種の仕事のコツなのかもしれません。週末の夜には、パブ、ビリヤード（poolと呼んでいました）、ライブ音楽（LiveではなくGigsと呼びます）、カラオケ（Simonさんのお気に入り）、様々なところに連れ出してもらいました。どこに出かけても数本の赤ワインのボトルが空き、そんな楽しい時間を過ごした後、決まってタクシーを相乗りして帰りました。偶然家が近所だったので、帰る方向が一緒だったのです。タクシーの車内では、1対1で研究の話、家族・故郷の話等、いろいろと話をしました。あるとき、私が東京で忙しかったときの話をしたときでしょうか、Simonさんから『そんなに大変な学生教育なんて興味がないよ』と聞かされる時があります。しかし、私は、それは謙遜した冗談だと思います。いつも一緒に研究する大学院生や若手研究者と膝をつき合わせて面談をし、研究成果を組み立てていく姿に、面倒見のよさや教えることへの情熱を誰もが感じることでしょう。学内の交流行事には必ず参加し、若手に近況を尋ね、同情したり一緒に笑ったり、自分の苦労話をしたりと、周りを励ます存在を買って出ます。スランプに陥った学生がいると聞くと、自分の直接の学生ではなくとも自分の部屋に呼び出して話を聞き、時には夕食に連れ出すというシーンもあり、その気配りにとっても感心しました。

Simonさんの奥様は日本人です。お子様は2人いて日本語も話します。そんなご縁もあり、Poulton家のお宅に何度も招いてもらって、バーベキューや夕食を共にさせて頂きました。もちろん食卓には赤ワインが並び、一緒に奥様お手製のお料理を頂きました。お好み焼き、年越し蕎麦、お正月のお餅等、いつもとてもおいしかったです。ここでも暖かな場を提供して頂きました。

6. おわりに

ここまでで紹介したように、私は在外活動を通して充実した体験して日本に帰ってきました。期間中に得られた分析データや研究成果は、これからもリーズ大学と交流を続けながら公表に向けて準備していきたいと考えています。データや分析技術もちろん収穫ではありますが、リーズでの生活や欧州での学会を通して人とのつながりを作ることができたことが何より重要だったと思います。在外期間中に会った研究者と今後とも協力し合えれば、次の発見や研究成果が続いていくことと思います。そして、出会った人、お世話になった人に次に会うときにより知らせができるように、頑張って研究や語学を頑張ろうというモチベーションも生まれています。

近年では、日本人研究者の海外留学の機会が減る傾向にあると報じられています。その理由は、海外に出なくとも日本の研究環境がある程度高い水準にあることや、国内の研究コミュニティから遠ざかるリスクがあることが主なものではないでしょうか。確かに、日本の生活環境、経済の状況、研究者にとっての環境はまだ恵まれている方だと思いました。それでも海外に赴いて技術交流や国際協力体制を整える必要性は依然としてありますし、研究者としてのことに限ったことでもないですが、アジア人・日本人として自分たちが何者で何ができるのかを考えるきっかけにもなると思います。それは、ポジションを得て長く海外で活動している研究者や、あるいは海外で活躍するスポーツ選手などがもっと深く体験することなのかもしれません。私の思ったアジア人の印象は、ハードワークができる人が多いということです。限られた時間で、作業や執筆を終わらせようとするエネルギーは秀でているものはあります。しかし、それが他国の言語、文化・習慣、働き方の価値観の違いに直面したときに、互いをリスペクトできるかどうかで良くも悪くも働きます。例えば、私のルールを破った時間外の実験室使用もそうですし、見聞きしたなかでは、一切誰とも話さずに黙々と装置を使い続けるアジア人もいますし、他者と交流無く自分の論文のみに取り組み英文の添削を頼む人もいます。もちろん、在外活動の目的はひとそれぞれです。しかし、個人的には、それはホームステイ中に見た部屋に閉じこもる留学生のように、得られた機会を有意義に使えていないように思いました。他国の慣例に単に習うだけでなく、日本の慣習の中で育ったことをポジティブに活かしてグループに加わっていくこともできると思います。やはり、細かいことに気が付いて取り組めるのは日本人の気質に分がありそうで、共同研究の議論のなかで細かい整合性をとるといったような活躍の場が日本人にはあると思います。また、ぶれること無く協力者には日本人なりの礼を尽くしていた方がお互いに気持ちがよいです。

イギリスでの生活を体験し、様々な国や背景の方々と出会うことができ、体験したことを踏まえて少し広く考えてみると、今まであまり気が付かなかったことが見えてきました。今回を機に研究に対する展望も次のステージへ具現化しそうですし、目指す研究者像も見えてきたように思います。もし、私に聞くのであれば、留学・在外活動は是非挑戦すべきだと勧めます。ここまで、イギリスでお世話になった方々とのエピソードのみを挙げてしまいましたが、他にも感謝すべき方々がたくさんいます。準備期間を含め様々な方面でサポートして頂いた、家族・友人、1年のサバティカル期間を認めて快く送り出して頂いた東京大学の地球惑星システム科学講座、地球惑星科学専攻の皆様に感謝を表します。

Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2019 年度年会費のお支払につきまして

先にお知らせいたしましたように、2019 年 11 月 1 日をもって一般社団法人日本有機地球化学会が発足いたしました。学会員の皆様におかれましては、ぜひこれまでと同様に年会費をお支払いいただき、本会の運営を支えていただければと思います。法人化後も本会の年会費は以下のように従来と同様です。

正会員：年額 3000 円

学生会員：年額 1000 円

本法人の事業年度は学会ホームページに掲載されている定款（第 32 条）にありますように、毎年 7 月 1 日から翌年 6 月 30 日までです。よって、会費の有効期間も毎年 7 月 1 日から翌年 6 月 30 日となります。本年度は法人への移行期ということで、法人初年度（2019 年度）の年会費の有効期間について以下の**特例**があります。

2019 年 10 月までに本法人の前身である任意団体、日本有機地球化学会への 2019 年度年会費をお支払い済みの方は、本法人の初年度（2019 年 11 月—2020 年 6 月）の年会費につきましては免除されますので、お支払いいただく必要はございません。

なお、まだお支払いいただいていない会員の皆さまは、従来通りシクミネットによるオンライン決済システムをご利用の上、お支払いください。その際の年会費有効期間も **2020 年 6 月末まで**となります。

<年会費支払い方法>

シクミネットによるオンライン決済システム (<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>)

（メニュー → お支払い → 会費支払い）

（コンビニ、ペイジー、クレジットカードがご利用いただけます。）

【ご案内】

（１）会員ID及び初期パスワードがご不明な場合は、事務局までお問い合わせください。

（２）2018 年以前に前身の日本有機地球化学会会費の未払いがある会員様へは、個別にご連絡させていただきます。

本件に関するお問い合わせは、

日本有機地球化学会事務局 office@ogeochem.jp

まで、よろしくお願いいたします。

2019 年度 総会議事録

- 1 日時 2019 年 8 月 28 日（水）16:40～18:10
- 2 会場 石川県政しいのき迎賓館 セミナールーム B （石川県金沢市）
- 3 議長選出 奥井明彦会員を議長に選出した。
- 4 開会
 - ・会則第 7 条に則って総会の成立要件を確認した。2019 年 8 月 9 日現在の会員総数は 153 名で、このうち正会員は 117 名、名誉会員は 7 名であり、正会員と名誉会員の合計は 124 名である。これにより、総会の定足数は 124 名の 5 分の 1 である 24.8 名（25 名）となる。一方、総会の出席者は 27 名、事前の委任状提出者は 8 名で、これらの合計である 35 名は定足数の 25 名を超えた。以上のことから、この 2019 年度総会の成立を確認した。
- 5 議事 1 ― 事業全般（法人化、事業、会計、会計監査、選挙）
 - 5.1 2018 年度事業・会計・会計監査報告

以下の内容について事務局および金子監事から報告があり、出席者の賛成多数により承認された。
 - (1) 出版・発行関係
 - ・ニュースレター No. 67（2018 年 1 月 31 日）、No. 68（2018 年 7 月 2 日）発行
 - ・ROG Vol. 34 Nos. 1-2（2018 年 12 月 30 日）発行、45 ページ
 - (2) 会議関係
 - ・学術賞受賞候補者選考委員会（随時 email にて）
 - ・田口賞受賞候補者選考委員会（随時 email にて）
 - ・理事会（2018 年 8 月 29 日・東京海洋大学（品川キャンパス）9 号館 2 階会議室、随時 email にて）
 - ・第 36 回有機地球化学シンポジウム（2018 年 8 月 30 日～31 日・東京海洋大学）
 - ・総会（2018 年 8 月 30 日、東京海洋大学 品川キャンパス 白鷹館 2 階 多目的スペース 1）
 - ・ROG 編集委員会
 - ・記念事業・マニュアル編集委員会
 - ・将来計画委員会（学会法人化の検討と準備）
 - ・共催 日本地質学会第 125 年学術大会 堆積部会所属 4 セッション（2018 年 9 月 5 日～9 月 7 日、北海道大学）
 - (3) 事務局関係
 - ・賛助会員の勧誘、ROG の販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
 - ・会計処理、会員管理、ホームページの更新
 - ・会費収納・会員管理システム「しくみネット」の運用
 - ・長期財務計画の検討、会費滞納者への働きかけ
 - ・ROG の電子化（J-STAGE に ROG 最新号（第 33 巻）登録）
 - ・日本学術会議協力学術研究団体としての学会名鑑登録情報の更新（2018 年 10 月 18 日）
 - ・日本学術会議ほかからの情報の配信（18 件）、各種応募案内（12 件）

(4) 会計実績

・一般会計

大項目	小項目	2018年度			コメント
		当初予算	修正予算	決算	
収入	賛助会費	¥200,000	¥200,000	¥220,000	昨年度請求の未払い分1件を含む
	個人会費	¥300,000	¥300,000	¥431,000	2017年度以前の未払分¥235,000を含む
	ROG販売	¥30,000	¥30,000	¥4,410	
	シンポ協賛金	¥60,000	¥60,000	¥60,000	
	シンポ参加費ほか	¥100,000	¥192,000	¥225,000	品川シンポ2018（会員42名、非会員10名）
	利子ほか	¥100	¥10	¥13	
	計	¥690,100	¥782,010	¥940,423	
	前年度繰越金	¥2,399,093			2017年度決算報告（総会承認）
総計（＝繰越金＋決算収入）		¥3,089,193	¥3,181,103	¥3,339,516	
支出	ROG印刷費	¥300,000	¥300,000	¥143,964	
	ROG送料	¥30,000	¥30,000	¥19,980	
	HP維持費	¥28,000	¥28,000	¥28,836	
	シンポジウム費	¥50,000	¥100,000	¥112,158	品川シンポ2018
	事務局経費・雑費	¥200,000	¥210,000	¥201,428	
	法人化関連費	¥450,000	¥200,000	¥0	
	計	¥1,058,000	¥868,000	¥506,366	
	総計（＝収入－決算支出）	¥2,833,150			次年度繰越金

前年度繰越金は2017年度決算により総会承認済み。

会費振替口座残高	¥1,021,697
一般会計口座残高	¥1,811,453
合計	¥2,833,150

・田口基金

大項目	小項目	2018年度			コメント
		当初予算	修正予算	決算	
収入	利子	¥14	¥0	¥1,779	定期預金の引き出しに伴う利子
	前年度繰越金	¥1,495,030			
	総計	¥1,495,044	¥1,495,030	¥1,496,809	
支出	副賞（田口賞）	¥50,000	¥100,000	¥100,000	品川シンポ2018 田口賞2名
	関連経費	¥0	¥0	¥0	
	計	¥50,000	¥100,000	¥100,000	
総計（＝収入－決算支出）		¥1,396,809			

前年度繰越金は2017年度決算により総会承認済み。

田口基金口座残高	¥96,809
田口基金定額貯金	¥1,300,000

(5) 会計監査

会計監査報告

日本有機地球化学会一般会計および田口基金の2018年度会計報告を、出納簿、請求書、郵便貯金および振替口座、その他提示された証明書類に基づいて審査した結果、それが正確に処理されていると認められましたので、ここに報告致します。

平成 31 年 2 月 25 日

監事 金子 信行 

(6) 2018 年財務会計に関する監査の意見とその対応

①シンポジウムの参加費と懇親会費の処理

【監査意見】シンポジウムに関する振込金の一部が、学会のゆうちょ銀行口座から支払われていた。シクミネットから直接世話人へ振り込むよう改善する。

【対応】学会会計とシンポジウム世話人との間の送金は、シンポジウムの準備に支障がないように、かつ、できる限り少ない回数で済むように心がける。

②シクミネットを利用した参加費の支払い

【監査意見】会員専用のシクミネットにも拘らず、非会員に対するシンポジウム参加費が選択可能であったことから、手続きの誤りが発生した。

【対応】学会会計とシンポジウム誤操作があまりにも多発するようであれば、会場受付での支払いを考えるほうがよい。

③シンポジウム会計の適切化

【監査意見】シンポジウム参加費の一部が学会会計に還流される仕組みであることが、シンポジウム会計を複雑にしている。

【対応】シンポジウムの予算および決算を迅速に策定する。このために、事務局はシンポジ

ウム世話人のための「会計手引書」を作成する。

5.2 2019 年度事業・会計中間報告・今後の計画（2019 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

以下の内容について事務局から報告と提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

5.2.1 2019 年度事業中間実績報告（2019 年 1 月 1 日～6 月 30 日）

(1) 出版関係

- ・ニュースレター No. 69（2019 年 1 月 23 日）、No. 70（2019 年 7 月 16 日）発行

(2) 会議関係

- ・理事会（随時 email にて）
- ・学術賞受賞候補者選考委員会（2019 年、随時 email にて）
- ・田口賞受賞候補者選考委員会（2019 年、随時 email にて）
- ・シンポジウム実行委員会（随時 email にて）
- ・NL 編集委員会（随時 email にて）
- ・ROG 編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会（随時 email にて）

(3) 事務局関係

- ・賛助会員の勧誘、ROG の販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新
- ・会費収納・会員管理システム「しくみネット」の運用
- ・会費未納者への働きかけ、長期財務計画の検討
- ・事務局会議（随時 email にて）
- ・日本学術会議ほかからの情報の配信（10 件）、各種応募案内ほか（3 件）

(4) 選挙関係

- ・会長・副会長・理事・監事選挙（2019 年 6 月 3 日 告示、7 月 14 日 無投票当選決定）

5.2.2 2019 年度事業中間計画（2019 年 7 月 1 日～12 月 31 日）

(1) 出版関係

- ・Vol. 35 No. 1 を 2019 年 10 月に web 公開、No. 2 を 2019 年 12 月に発行

(2) 会議関係

- ・理事会（2019 年 8 月 27 日、金沢大学（角間キャンパス）2 号館 B ブロック 1 階 地球学第 2 実験室（2B122）、随時 email にて）
- ・第 37 回有機地球化学シンポジウム（2019 年 8 月 27 日～29 日、石川県政しいのき迎賓館（旧・石川県庁））
- ・総会（2019 年 8 月 28 日、石川県政しいのき迎賓館セミナールーム B）
- ・NL 編集委員会（随時 email にて）
- ・ROG 編集委員会（随時 email にて）
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会（随時 email にて随時）
- ・共催 日本地質学会第 126 年学術大会（2019 年 9 月 23 日～25 日、山口大学）

(3) 事務局関係

- ・賛助会員の勧誘
- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新
- ・会費収納・会員管理システム「しくみネット」の運用
- ・会費未納者への働きかけ、長期財務計画の検討
- ・日本学術会議ほかからの情報の配信、各種応募案内、外部からの依頼対応

(4) 会計中間実績（6月30日現在）および今後の見通し

①一般会計 上期実績・下期見通し

大項目	小項目	2019年度					増減	コメント
		当初予算	修正予算	上期実績 (1-6月)	下期見通し (7-12月)	下期見通し (9月上旬 に法人化し た場合)		
収入	賛助会費	200,000	200,000	160,000	40,000	40,000		
	個人会費	403,000	403,000	246,000	173,000	173,000		2020年度年会費¥3,000 2019年度年会費 ¥193,000 2018年度年会費 ¥12,000 2017年度以前の年会費 ¥36,000 年会費改定による前納年会費不足分 ¥2,000 2019年度年会費未払い分 (¥366,000 (正会員 117名・学生会員15名) - ¥193,000 = ¥ 173,000)
	ROC販売	2,000	2,000	2,205	2,000	2,000		
	シンボ協賛金・剰余金	60,000	60,000	0	60,000	60,000		
	シンボ参加費	200,000	200,000	0	204,000	204,000		金沢シンボ2019 (会員36名、非会員8名)
	利子ほか	10	10	8	6	0		
	計	865,010	865,010	408,213	479,006	479,000		
	前年度繰越金	2,833,150	2,833,150	2,833,150	2,935,027	2,935,027		
総計		3,698,160	3,698,160	3,241,363	3,414,033	3,414,027		
支出	ROC印刷費	300,000	300,000	178,200	0	0		
	ROC送料	30,000	30,000	16,964	0	0		
	IF維持費	28,000	28,000	0	28,404	3,780		
	シンポジウム費	100,000	100,000	0	100,000	100,000		(参考) 品川シンボ2018 ¥112,158 (懇親会費は オンラインシステム維持費 ¥16,394/月, 手数料 ¥432/月, JpQ年会費¥10,000 定款案作成費
	事務局経費・雑費	220,000	220,000	111,172	101,530	33,868		
	法人化関連費	250,000	150,000	0	150,000	150,000	-100,000	
	計	928,000	828,000	306,336	379,934	287,648		
	次年度繰越金	2,770,160	2,870,160	2,935,027	3,034,099	3,126,379		

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も運動）

②田口基金 上期実績・下期見通し

大項目	小項目	2019年度					増減	コメント
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	下期見通し (9月上旬 に法人化し た場合)		
収入	利子	0	0	0	0	0	0	
前年度繰越金		1,395,030	1,395,030		1,395,030	1,395,030		
総計		1,395,030	1,395,030		1,395,030	1,395,030		
支出	副賞（田口賞）	50,000	100,000	0	100,000	100,000	50,000	金沢シンボ2019 田口賞2名
	関連経費	0	0	0	0	0	0	
	計	50,000	100,000	0	100,000	100,000	50,000	
次年度繰越金		1,345,030	1,295,030		1,295,030	1,295,030		

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も運動）

5.3 「一般社団法人 日本有機地球化学会」定款について

一般社団法人 日本有機地球化学会定款

令和〇年〇月〇日 作成
令和〇年〇月〇日 公証人認証

第1章 総則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本有機地球化学会（以下「本会」という。）と称する。

2 本会の英文表記を The Japanese Association of Organic Geochemists (略称 JAOG) とする。

(事務所)

第2条 本会は、主たる事務所を札幌市に置く。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 本会は有機地球化学に関する学理及びその応用についての研究発表、情報交換並びに国内外の関連学会との連携協力を行うことにより、有機地球化学の進歩発展を図り、もってわが国における学術の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 研究発表会、学術講演会及びシンポジウムの開催
- (2) 会誌及び学術図書の刊行
- (3) ニュースレターの発行
- (4) 研究の奨励及び研究業績の表彰
- (5) 関連学会との交流協力
- (6) その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

(法人の構成員)

第5条 本会の会員は、次の5種とし、正会員及び名誉会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 本会の目的に賛同して入会した個人
- (2) 学生会員 本会の目的に賛同して入会した大学または大学院の学生である個人
- (3) 賛助会員 本会の目的に賛同し、本会の事業を賛助するために入会した団体または個人
- (4) シニア会員 本会に通算10年以上正会員として在籍し、常勤職に就いていない60歳以上の会員であって、本会所定の方法により認定を受けた個人
- (5) 名誉会員 有機地球化学または関連する分野において顕著な功績を有し、本会の発展に貢献し、理事会で審議・承認された個人

(入会)

第6条 本会の会員として入会しようとする者は、理事会が別に定める所定の手続きを経て理事会の承認を得なければならない。

(会費)

第7条 本会の事業活動に生じる費用に充てるため、正会員及び学生会員、賛助会員は総会において別に定める会費を納入しなければならない。

- 2 名誉会員及びシニア会員は、会費を納めることを要しない。

(任意退会)

第8条 会員は、理事会において別に定める退会届を提出することにより、任意にいつでも退会することができる。

- 2 退会する会員は、未納の会費を納入しなければならない。

(除名)

第9条 会員が次のいずれかに該当するに至ったときは、総会の決議によって当該会員を除名することができる。

- (1) 本会の名誉及び信用を著しく傷つける行為をしたとき
- (2) 本会の目的を明らかに著しく損なう行為をしたとき
- (3) その他除名すべき正当な事由があるとき

(会員資格の喪失)

第10条 会員は次のいずれかに該当するに至ったときは、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき
- (2) 除名されたとき
- (3) 破産手続開始の決定、後見開始の審判または保佐開始の審判を受けたとき
- (4) 第8条の会費の支払義務を2年以上履行しなかったとき
- (5) 死亡し、もしくは失踪宣告を受け、または本会が解散したとき
- 2 本会は、会員がその資格を喪失しても、既納の会費については、これを返還しない。

第4章 総会

(構成)

第11条 総会は、すべての正会員及び名誉会員をもって構成する。

2 前項の総会をもって一般法人法上の社員総会とする。

(権限)

第12条 総会は、次の事項について決議する。

- (1) 事業報告及び事業計画の承認
- (2) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）の承認
- (3) 理事及び監事の選任または解任
- (4) 定款の変更
- (5) 会員の除名
- (6) 解散及び残余財産の処分
- (7) その他総会で決議するものとして法令又はこの定款で定める事項

(開催)

第13条 本会の定時総会は、毎事業年度終了後3箇月以内に1回開催するほか、臨時総会は、必要がある場合に開催する。

(招集)

第14条 総会は、法令に別段の定めがある場合を除き、会長が招集する。

2 総会員議決権の10分の1以上を有する正会員は、理事に対して総会の目的である事項及び招集理由を示して、総会の招集を請求することができる。

(議長)

第15条 総会の議長は、総会において、出席正会員の中から選出する。

(議決権)

第16条 総会における議決権は、社員1名につき1個とする。

(決議)

第17条 総会の決議は、総社員の議決権の5分の1以上を有する社員が出席し、出席した当該社員の議決権の過半数をもって行う。

2 前項の規定に関わらず、次の決議は、総社員の半数以上であって、総社員の議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う。

- (1) 定款の変更
- (2) 会員の除名
- (3) 監事の解任
- (4) 役員等の責任の一部免除
- (5) 事業の譲渡
- (6) 解散及び継続
- (7) 吸収合併契約の承認及び新設合併契約の承認

3 総会に出席することができない社員は、他の社員を代理人として議決権の行使を委任することができる。この場合においては、当該社員又は代理人は、総会ごとに代理権を証する書類を本会に提出しなければならない。

(議事録)

第18条 総会の議事については、総会に出席した理事1名が議事録を作成し、正会員から選出された議事録署名人1名以上が当該議事録に記名押印する。

第5章 役員

(役員の設定)

第19条 本会に、次の役員を置く。

- (1) 理事 15名以内

(2) 監事 2 名以内

2 理事のうち 2 名を代表理事とし、代表理事をもって会長、副会長とする。

(役員の選任)

第 20 条 理事及び監事は、総会の決議により正会員の中から選任する。

2 会長及び副会長は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

(理事の職務及び権限)

第 21 条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。

2 会長は、法令及びこの定款で定めるところにより、本会を代表し、その業務を執行する。

3 副会長は会長を補佐する。

(監事の職務及び権限)

第 22 条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令の定めるところにより、監査報告を作成する。

2 監事は、理事に対して事業の報告を求め、本会の業務及び財産の状況を調査することができる。

(役員の任期)

第 23 条 理事及び監事の任期は、選任後 2 年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する 定時総会の終結の時までとする。ただし、再任は妨げない。

2 補欠として選任された理事及び監事の任期は、退任した理事及び監事の任期の満了する時までとする。

(役員の解任)

第 24 条 理事及び監事は、総会の決議によって解任することができる。ただし、監事を解任する決議は、総社員の半数以上であって、総社員の議決権の 3 分の 2 以上に当たる多数をもって行わなければならない。

(責任の免除)

第 25 条 本会は、理事及び監事の一般法人法第 111 条第 1 項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、理事会の決議によって、賠償責任額から法令で定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。

第 6 章 理事会

(構成)

第 26 条 本会に理事会を置く。

2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(開催)

第 27 条 理事会は、定例理事会として毎事業年度に 2 回開催するほか、必要がある場合に開催する。

(権限)

第 28 条 理事会は、この定款に定めるもののほか、次の職務を行う。

(1) 本会の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長及び副会長の選定及び解職

(招集)

第 29 条 理事会は、各理事が招集する。

(決議)

第 30 条 理事会の決議は、この定款に別段の定めがある場合を除き、議決に加わることができる理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

2 前項の規定に関わらず、理事が理事会の決議の目的である事項について提案をした

場合において、当該提案につき理事（当該事項について議決に加わることができるものに限る。）の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたとき（監事が当該提案について異議を述べたときを除く。）は、当該提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなす。

（議事録）

第 31 条 理事会の議事については、法令に定めるところにより、議事録を作成する。

2 出席した理事及び監事は、前項の議事録に署名又は記名押印する。

第 7 章 資産及び会計

（事業年度）

第 32 条 本会の事業年度は、毎年 7 月 1 日から翌年 6 月 30 日までの年 1 期とする。

（事業計画及び収支予算）

第 33 条 本会の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度の開始日の前日までに、会長が作成し、理事会の決議を経て、総会の承認を受けなければならない。

2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間、備え置きするものとする。

（事業報告及び決算）

第 34 条 本会の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を受けなければならない。

(1) 事業報告

(2) 事業報告の附属明細書

(3) 貸借対照表

(4) 損益計算書（正味財産増減計算書）

(5) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）の附属明細書

2 前項の承認を受けた書類のうち、第 1 号、第 3 号、第 4 号の書類については、定時総会に提出し、その承認を受けなければならない。

3 第 1 項の書類のほか、監査報告を主たる事務所に 5 年間備え置きするとともに、定款、会員名簿を主たる事務所に備え置きするものとする。

（剰余金の分配禁止）

第 35 条 本会は、剰余金の分配を行わない。

第 8 章 定款の変更及び解散

（定款の変更）

第 36 条 この定款は、総会において、総社員の半数以上であって、総社員の議決権の 3 分の 2 以上に当たる多数の決議によって変更することができる。

（解散）

第 37 条 本会は、総会において、総社員の半数以上であって、総社員の議決権の 3 分の 2 以上に当たる多数の決議その他法令に定められた事由により解散する。

（残余財産の帰属）

第 38 条 本会が清算する場合において有する残余財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第 5 条第 17 号に掲げる法人または国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第 9 章 公告の方法

（公告の方法）

第 39 条 本会の公告は、電子公告により行う。

2 事故その他やむを得ない事由により、前項の電子公告による公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法により行う。

附則

(最初の事業年度)

第 40 条 本会の設立初年度の事業年度は、本会の成立の日から令和 2 年 6 月 30 日までとする。

第 41 条 この法人の設立時社員の氏名及び住所は次のとおりである。

(省略)

(設立時理事及び設立時監事の氏名及び住所)

第 42 条 この法人の設立時理事及び設立時監事の氏名及び住所は次のとおりである。

設立時理事

(省略)

以上、一般社団法人日本有機地球化学会を設立するために設立時社員である奈良岡浩、稲場土誌典、大場康弘、奥井明彦、沢田健、三瓶良和、高野淑識、力石嘉人、薮田ひかる、山口保彦、山中寿朗、山本真也、山本正伸、吉岡秀佳、三田肇の定款作成代理人である司法書士寺西広は、電磁的記録である本定款を作成し電子署名する。

5.4 2019 年度日本有機地球化学会役員選挙結果について

以下の内容について選挙管理委員会から報告があった。

2019 年 7 月 14 日

日本有機地球化学会事務局御中

日本有機地球化学会選挙管理委員会

金子雅紀・中村英人・齊藤諒介

2019 年度日本有機地球化学会役員 選挙結果について

梅雨の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。さて、表題の件につきまして、選挙管理委員会では 6 月 3 日から 7 月 1 日にかけて、各役職の立候補および推薦の受付を行いましたところ、下記の通り、会長に 1 名、副会長に 1 名、理事に 12 名、および監事に 1 名の立候補ないし推薦がございました。12 名の候補者があがった理事に関しては、選挙管理委員会で協議の結果、定員の「10 名程度」として許容される範囲であると判断いたしました。従って、選挙細則第 4 条(4)「候補者が定数を超えない場合は、候補者全員を無投票当選とする。」に従い、当選挙管理委員会との結論として、全ての候補者を無投票当選と判断いたします。

記

〔会長〕

奈良岡 浩（九州大学）

〔副会長〕

稲場 土誌典（国際石油開発帝石（株））

〔理事〕

大場 康弘（北海道大学）

奥井 明彦（出光興産（株））

沢田 健（北海道大学）

三瓶 良和（島根大学）

高野 淑識（海洋研究開発機構）

力石 嘉人（北海道大学）

藪田ひかる（広島大学）

山口 保彦（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）

山中 寿朗（東京海洋大学）

山本 真也（富士山科学研究所）

山本 正伸（北海道大学）

吉岡 秀佳（産業技術総合研究所）

〔監事〕

三田 肇（福岡工業大学）

以上

5.5 「一般社団法人 日本有機地球化学会」設立について

以下の内容について将来計画委員会と事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) 一般社団法人「日本有機地球化学会」の設立

- ・任意団体「日本有機地球化学会」から一般社団法人「日本有機地球化学会」への移行
- ・一般社団法人「日本有機地球化学会」の定款の制定

(2) 一般社団法人「日本有機地球化学会」の理事

- ・任意団体「日本有機地球化学会」が実施した 2019 年度役員選挙結果の適用
- ・選挙で選出された会長、副会長および、理事を一般社団法人「日本有機地球化学会」の理事とする

(3) 一般社団法人「日本有機地球化学会」への移行手続き

- ・一般社団法人「日本有機地球化学会」の新理事に一任

5.6 法人 2019 年度事業・会計計画（法人設立日～2020 年 6 月 30 日）

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) 出版関係

- ・ニュースレター No. 71 発行
- ・Vol. 35 No. 1 を 2019 年 10 月に web 公開、No. 2 を 2019 年 12 月に発行

(2) 会議関係

- ・第38回有機地球化学シンポジウムの準備
- ・理事会
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・シンポジウム実行委員会
- ・NL編集委員会
- ・ROG編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会
- ・共催 日本地質学会第126年学術大会（2019年9月23日～25日、山口大学）

(3) 事務局関係

- ・法人の登記、役員の交代と引き継ぎ、事務局の移転
- ・賛助会員の勧誘、ROGの販売促進、シンポジウム協賛の勧誘、長期財務計画の検討
- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新、「しくみネット」の運用、ROG電子化(J-STAGE)
- ・長期財務計画の検討、会費滞納者への働きかけ
- ・日本学術会議ほかからの情報の配信、各種応募案内、外部からの依頼対応

(4) 会計計画

①年会費の特例移行措置

- ・現在の年会費の有効期間を変更し、法人化後の会計期間（7月1日から翌年6月30日までの予定）と同じにする。移行措置として、任意団体時の最終年度の会費は法人化後の初年度の会費とみなす。
- ・賛助会員、新入会員、既会員すべてに同様に適用する。退会者は退会時の年度までの会費を納入して頂く。
- ・今回の会計報告はこれまでどおり、法人化後初年度の会計報告時には任意団体時までのものと、法人化後のものと、2つに分けて行う。

②一般会計

大項目	小項目	2018年度	2019年度	2020年度*	2019年度 (法人化した場合)**	法人2019年度*** (特例措置なし)	法人2019年度*** (特例措置あり)	*2020年1月1日～2020年12月31日 **2019年1月1日～法人登記日前日 ***法人登記日～2020年6月30日
		決算	通期見通し	予算	通期見通し	予算	予算	コメント
収入	賛助会費	220,000	200,000	200,000	200,000	100,000	0	
	個人会費	431,000	419,000	366,000	419,000	183,000	0	正会員117名、学生会員15名
	ROG販売	4,410	4,205	2,000	4,205	2,000	2,000	
	シンポ協賛金・剰余金	60,000	60,000	60,000	60,000	0	0	(参考) 品川シンポ2018 ¥60,000
	シンポ参加費	225,000	204,000	200,000	204,000	0	0	
	利子ほか	13	14	10	8	10	10	
	計	940,423	887,219	828,010	887,213	285,010	2,010	
前年度繰越金		2,399,093	2,833,150	3,034,099	2,833,150	3,126,379	3,126,379	
総計		3,339,516	3,720,369	3,862,109	3,720,363	3,411,389	3,128,389	
支出	ROG印刷費	143,964	178,200	300,000	178,200	300,000	300,000	
	ROG送料	19,980	16,964	30,000	16,964	30,000	30,000	
	HP維持費	28,836	28,404	28,404	3,780	24,624	24,624	
	シンポジウム費	112,158	100,000	100,000	100,000		0	
	事務局経費・雑費	201,428	212,702	220,000	145,040	111,172	111,172	オンラインシステム維持費、JpG年会費、手数料(¥432 x 12)、振込手数料(¥216 x 2)
	法人化関連費	0	150,000	0	150,000	0	0	
	計	506,366	686,270	678,404	593,984	465,796	465,796	
次年度繰越金		2,833,150	3,034,099	3,183,705	3,126,379	2,945,593	2,662,593	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

③田口基金

大項目	小項目	2018年度 決算	2019年度 通期見通し	2020年度* 予算	2019年度 通期見通し	法人2019年度 予算	法人2019年度 予算	コメント
収入	利子	1,779	0	0	0	0	0	
前年度繰越金		1,495,030	1,396,809	1,296,809	1,396,809	1,296,809	1,296,809	
	総計	1,496,809	1,396,809	1,296,809	1,396,809	1,296,809	1,296,809	
支出	副賞（田口賞）	100,000	100,000	50,000	100,000	0	0	（参考）金沢シンポ2019 田口賞2名
	関連経費	0	0	0	0	0	0	
	計	100,000	100,000	50,000	100,000	0	0	
次年度繰越金		1,396,809	1,296,809	1,246,809	1,296,809	1,296,809	1,296,809	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

5.7 任意団体 2020 年度事業・会計計画（2020 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。学会は一般社団法人への移行を決議しているため、これは不測の事態が発生して円滑に移行できなかった場合の備えとして提案された。

(1) 出版・発行関係

- ・ニュースレター No. 71、No. 72 発行
- ・ROG Vol. 36 発行

(2) 会議関係

- ・第 38 回有機地球化学シンポジウム
- ・総会
- ・理事会
- ・学術賞受賞候補者選考委員会、田口賞受賞候補者選考委員会
- ・シンポジウム実行委員会、NL 編集委員会
- ・ROG 編集委員会、記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会（学会法人化の検討と準備の継続）

(3) 事務局関係

- ・役員の交代と引き継ぎ、事務局の移転
- ・賛助会員の勧誘、ROG の販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新、ROG 電子化（J-STAGE に ROG 最新号登録）
- ・日本学術会議ほかからの情報の配信、各種応募案内、外部からの依頼対応

(4) 会計計画

- ・一般会計

大項目	小項目	2018年度 決算	2019年度 通期見通し	2020年度* 予算	2019年度 (法人化した場合) ** 通期見通し	法人2019年度 *** (特例措置なし) 予算	法人2019年度 *** (特例措置あり) 予算	*2020年1月1日～2020年12月31日 **2019年1月1日～法人登記日前日 ***法人登記日～2020年6月30日 コメント
収入	賛助会費	220,000	200,000	200,000	200,000	100,000	0	
	個人会費	431,000	419,000	366,000	419,000	183,000	0	正会員117名、学生会員15名
	ROG販売	4,410	4,205	2,000	4,205	2,000	2,000	
	シンポ協賛金・剰余金	60,000	60,000	60,000	60,000	0	0	（参考）品川シンポ2018 ¥60,000
	シンポ参加費	225,000	204,000	200,000	204,000	0	0	
	利子ほか	13	14	10	8	10	10	
	計	940,423	887,219	828,010	887,213	285,010	2,010	
前年度繰越金		2,399,093	2,833,150	3,034,099	2,833,150	3,126,379	3,126,379	
	総計	3,339,516	3,720,369	3,862,109	3,720,363	3,411,389	3,128,389	
支出	ROG印刷費	143,964	178,200	300,000	178,200	300,000	300,000	
	ROG送料	19,980	16,964	30,000	16,964	30,000	30,000	
	HP維持費	28,836	28,404	28,404	3,780	24,624	24,624	
	シンポジウム費	112,158	100,000	100,000	100,000		0	
	事務局経費・雑費	201,428	212,702	220,000	145,040	111,172	111,172	オンラインシステム維持費、JpG年会費、手数料（¥432 x 12）、振込手数料（¥216 x 2）
	法人化関連費	0	150,000	0	150,000	0	0	
	計	506,366	686,270	678,404	593,984	465,796	465,796	
次年度繰越金		2,833,150	3,034,099	3,183,705	3,126,379	2,945,593	2,662,593	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

・田口基金

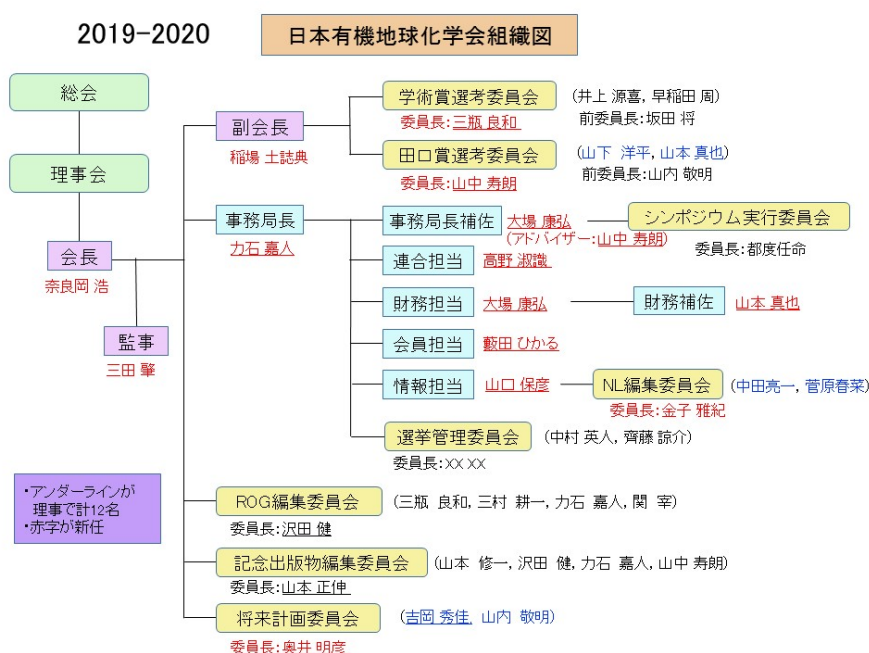
大項目	小項目	2018年度 決算	2019年度 通期見通し	2020年度* 予算	2019年度 通期見通し	法人2019年度 予算	法人2019年度 予算	コメント
収入	利子	1,779	0	0	0	0	0	
前年度繰越金		1,495,030	1,396,809	1,296,809	1,396,809	1,296,809	1,296,809	
	総計	1,496,809	1,396,809	1,296,809	1,396,809	1,296,809	1,296,809	
支出	副賞（田口賞）	100,000	100,000	50,000	100,000	0	0	（参考）金沢シンポ2019 田口賞2名
	関連経費	0	0	0	0	0	0	
	計	100,000	100,000	50,000	100,000	0	0	
次年度繰越金		1,396,809	1,296,809	1,246,809	1,296,809	1,296,809	1,296,809	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

6 議事2 — 役員および会則

6.1 2020～2021 年度日本有機地球化学会役員

役員およびその他の委員の役職と組織について、奈良岡次期会長から以下の提案があり、出席者の賛成多数により承認された。



7 議事3 — 委員会活動

7.1 学術賞選考委員会

坂田委員長から以下の学術賞選考結果の報告があった。

- ・受賞者 高田 秀重 会員
- ・所属・職名 東京農工大学 農学研究院物質循環環境科学部門/農学部 環境資源科学科 教授
- ・研究題目 水・堆積物環境における有機汚染物質の動態に関する研究
- ・研究業績 査読付き論文（総説を含む） 172 編
査読なし論文等 26 編
著書等 14 編（うち単著 6 編）

7.2 田口賞選考委員会

山内委員長から以下の田口賞選考結果の報告があった。

- ・受賞者 1 伊左治 雄太 会員

- ・所属・職名 国立研究開発法人 海洋研究開発機構 研究員
- ・研究題目 テトラピロール化合物を用いた分子レベル生物地球化学循環に関する研究
- ・研究業績 国際学会主著 9 件（うち口頭 5 件）
国内学会主著 11 編（うち口頭 8 件）
- ・受賞者 2 大西 雄二 会員
- ・所属・職名 京都大学生態学研究センター 博士研究員
- ・研究題目 深海の特殊環境に形成する生物群集を対象とした安定同位体生態学の高度化
- ・研究業績 査読付き学術論文 5 編

7.3 ROG 編集委員会

沢田委員長から以下の報告があった。

(1) Researches in Organic Geochemistry Volume 35 (35 巻) 編集状況

Vol. 35、No. 1 を 2019 年 10 月（web 公開）、No. 2 を 2019 年 12 月に刊行予定。

- ・投稿論文は現時点で 2 報。
- ・一昨年からの投稿・審査状況は別紙「ROG_Processing190814 理事会資料」に記載。
- ・昨年同様、Vol. 35、Nos. 1-2 の冊子体の印刷は 2020 年 1 月以降。

※この数年、投稿数が大変少ないので、呼びかける。

(2) 学術賞および奨励賞(田口賞)受賞記念論文

- ・学術賞受賞記念論文：2014 年度受賞者 三瓶会員および 2016 年度受賞者 山本正伸会員に執筆を依頼している。

→次の受賞者にも依頼する予定。

- ・奨励賞(田口賞)受賞記念論文：2015 年度受賞者 中村英人会員に執筆を依頼している。Vol. 35 に掲載予定。

→次の受賞者（菅原さん）にも依頼する予定。

(3) ROG の web 公開 (ROG 電子化) の変更と ROG ページの刷新

■2017 年から ROG の PDF ファイルを J-STAGE に掲載して公開している。一方、本会 HP にも同じ PDF ファイルが掲載されていて、二重掲載の状態になっている。これを本会 HP の ROG ページでは J-STAGE へのリンクを貼るだけにして、J-STAGE を ROG の公開用に使うことにする。

《J-STAGE の利点》

- ・HP のレイアウトなどが簡潔・スタイリッシュで、わかりやすい。
- ・DOI が付与され書誌情報が追加されているため、検索しやすい。
- ・引用文献についても DOI が埋め込まれている。
- ・英語ページもある。
- ・月毎のアクセス数ランキングなどの工夫された機能がある。

■学会 ROG ホームページに ROG の投稿規定を掲載する（投稿規定はこれまで web 公開されていなかった）。また、編集委員全員の氏名・所属機関を掲載する。

■法人化後の電子化担当者を ROG 編集委員長が引き受ける。

7.4 記念事業・マニュアル編集委員会

山本正伸委員長から学会ウェブサイトの掲示を用いて報告があった。

8 議事 4 — その他

8.1 来年度のシンポジウム開催場所

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) 経緯

- ・2019 年度 以前の開催から 10 年以上経過している金沢大学で長谷川卓会員がホストで 8

月末開催。

- ・2020 年度以降 間隔としては九州大学、島根大学、JAPEX、AIST で検討頂けないか打診したところ、島根大学（三瓶会員）および AIST（吉岡会員）から引き受け可能との連絡があった。理事会内の協議により 2020 年については間隔やこれまでの開催回数から AIST にお願ひすることとし、吉岡会員にも了承頂いた。九州大学については 2021 年に開催可能と連絡を頂いた。島根大学はそれ以降に開催を検討して下さることを三瓶会員から了承頂いた。

(2) 第 38 回有機地球化学シンポジウム（2020 年つくばシンポジウム）開催計画案

- ・日 程 2020 年 8 月下旬～9 月（予定）
- ・会 場 つくば または お台場（予定）
- ・世話人 吉岡秀佳会員（産業技術総合研究所）

8.2 会員の現況（2019 年 8 月 9 日現在）

以下の内容について、事務局から報告があった。

会員総数	153 名	（2018 年度は 168 名）
正会員	117 名	
学生会員	15 名	
名誉会員	7 名	
賛助会員	8 社	
シニア会員	6 名	

8.3 長期滞納者への働きかけ

以下の内容について、事務局から報告があった。

(1) 概要

昨年度に引き続き、2017 年度以前の年会費が未払いとなっている会員に対して、会長名による個人宛メールにて納付依頼を行った。その結果、25 名の会員からの入金があり、また 3 名の会員からは近日中に支払う旨の連絡を受けた。

(2) 送信履歴

①2018 年 9 月 25 日 ②2019 年 6 月 26 日 ③2019 年 7 月 25 日

(3) 問題点

連絡先がわからない方の大半が学生会員であり、指導教員から退会の申し出も出されている。一方で、未払いの年会費をどうするかについてはこれまで議論されていない。指導教員による未払い分の肩代わりの提案がある一方で、卒業後の未払い分について免除すべきとの意見もあり、学会として統一した対応が求められている。

(4) 対応案

新法人では、会費の支払い義務を 2 年以上履行しなかった場合、会員資格を喪失することから（定款案第 10 条）、該当者全員（正当な理由により猶予の申し出のあったものを除く）を退会とし、働きかけを終了する。

(5) 学生会員の滞納者の取り扱い

今後も継続して議論することになった。

8.4 長期財務計画

以下の内容について、事務局から報告があった。

(1) 問題点

年会費の納付率の低迷が続いており、現状の納付率（正会員 53.9%、学生会員 46.6%、2019 年 6 月末時点）が続く場合、2021 年度以降は毎年約 10 万円の赤字となることが見込まれる。約 2 年に及ぶ働きかけの結果、2017 年以前の年会費未納分についてはほぼ回収でき、また納付の働きかけにより、納付率をある程度上げることは可能であるものの、

出来るだけ事務局の手間と時間をかけずに納付率を上げる対策が必要。

(2) 対応案

正会員・学生会員については、ROG の配布対象を当該年度の年会費が支払われたものに限定してはどうか？（不足が出た場合には、次年度追加印刷が可能か？必要部数のみ印刷することで印刷費も圧縮できる）

(3) 一般会計の推移と見通し

一般会計										
大項目	小項目	2018年度	2019年度	2020年度*	2019年度 (法人化した場合)**	法人2019年度*** (特例措置なし)	法人2019年度*** (特例措置あり)	法人2020年度	法人2020年度 (納付率50%)	*2020年1月1日～2020年12月31日 **2019年1月1日～法人登記日前 ***法人登記日～2020年6月30日
		決算	通期見通し	予算	通期見通し	予算	予算	試算	試算	コメント
収入	賛助会費	220,000	200,000	200,000	200,000	100,000	0	200,000	200,000	
	個人会費	431,000	419,000	366,000	419,000	183,000	0	366,000	183,000	正会員117名、学生会員15名
	ROG販売	4,410	4,205	2,000	4,205	2,000	2,000	2,000	2,000	
	シンポ協賛金・剰余金	60,000	60,000	60,000	60,000	0	0	60,000	60,000	(参考)品川シンポ2018 ¥60,000
	シンポ参加費	225,000	204,000	200,000	204,000	0	0	200,000	200,000	
	利子ほか	13	14	10	8	10	10	10	10	
	計	940,423	887,219	828,010	887,213	285,010	2,010	828,010	645,010	
	前年度繰越金	2,399,093	2,833,150	3,034,099	2,833,150	3,126,379	3,126,379	2,662,593	2,662,593	
	総計	3,339,516	3,720,369	3,862,109	3,720,363	3,411,389	3,128,389	3,490,603	3,307,603	
支出	ROG印刷費	143,964	178,200	300,000	178,200	300,000	300,000	300,000	300,000	
	ROG送料	19,980	16,964	30,000	16,964	30,000	30,000	30,000	30,000	
	HP維持費	28,836	28,404	28,404	3,780	24,624	24,624	29,000	29,000	
	シンポジウム費	112,158	100,000	100,000	100,000	0	0	100,000	100,000	
	事務局経費・雑費	201,428	212,702	220,000	145,040	111,172	111,172	220,000	220,000	オンラインシステム維持費、JpG年会費、手数料(¥432 x 12)、振込手数料(¥216 x 2)
	法人化関連費	0	150,000	0	150,000	0	0	70,000	70,000	法人化関連費(2018年度理事会資料2の年間維持コスト¥70,000に基づき試算)
	計	506,366	686,270	678,404	593,984	465,796	465,796	749,000	749,000	
	次年度繰越金	2,833,150	3,034,099	3,183,705	3,126,379	2,945,593	2,662,593	2,741,603	2,558,603	
	前年度繰越金は今年度決算により修正(次年度繰越金も連動)							79,010	-103,990	

8.5 ROG 電子化の運用

以下の内容について、早稲田副会長から報告があった。

(1) 経緯

2008 年頃から ROG 電子化の検討を始め、2010 年から国立情報学研究所(NII)が運営する「電子図書館」に掲載を始めた。創刊号に遡って電子化作業を行い2011 年4 月に全巻*の電子化を完了した。

NII が2017 年3 月に「電子図書館」のサービスを終了したため、2017 年4 月から科学技術振興機構(JST)が運営するJ-STAGEに移行した。

*Vol. 19～24 の技術論文(全部で18 編)は、記念事業(地球・環境有機分子質量分析マニュアル)との関係からNII-ELSに掲載しなかったため、J-STAGEにも未掲載。学会HPには掲載済。

(2) 現状

新刊については、学会HPに掲載後、速やかにJ-STAGEに掲載している。J-STAGEと本会HPでは、PDF ファイル自体は同じであるが、J-STAGEではDOI が付与され書誌情報が追加されているため、検索されやすくなっている。また、引用文献についてもDOI が埋め込まれている。

(3) 2018 年の総会以降の作業

2019 年3 月: Vol. 34 を公開。

(4) 今後の予定・提案

- ・上記J-STAGE 未掲載の技術論文について掲載作業を行う。
- ・現在、本会HPとJ-STAGE に二重掲載になっているため、HP 掲載は廃止してJ-STAGE に一本化してはどうか。
- ・法人化後の電子化担当者をどうするか。ROG 編集委員のどなたかにお願いできないか。

8.6 他学会からの共催依頼

以下の内容について、事務局から報告があった。

■日本地質学会 堆積部会所属 4 セッション（2019 年 9 月 23 日～25 日、山口大学）

昨年に引き続き地質学会の堆積部会所属の下記 4 セッションを本会が共催する。

- ・石油・石炭地質と有機地球化学
- ・堆積物（岩）の起源・組織・組成
- ・炭酸塩岩の起源と地球環境
- ・堆積過程・堆積環境・堆積地質

この共催により、本学会会員（学生会員も含む）の参加登録費は地質学会会員と同額となり、これらのセッションで発表が可能となった。なお、共催に関して本学会の経済的な負担は生じなかった。

8.7 会員からのご質問とご意見

■一般社団法人への移行に関して、定款に会長の代理を定めておく必要はないのか。（井上源喜会員）

☐ 副会長が補佐するとの文言が定款にあるため必要ない。（奈良岡浩理事）

■一般社団法人への移行に関連して、今回の選挙では監事を 1 名しか決めていないが何らかの事情でその監事が責務を全うできなくなったときに備えて 2 名の方が望ましいのではないか。（井上源喜会員）

☐ その方向で検討する。（奈良岡浩理事）

■一般社団法人への移行に関して、定款第 14 条までは会員となっているが、それ以降は社員となっている。統一すべきではないか。（加藤進会員）

☐ 定款第 5 条に社員の定義があるので、問題ないはずであるが司法書士に確認する。（奈良岡浩理事）

■記念事業の原稿募集の情報を会員に知らせないとわかり難い。（金子信行会員）

☐ 色々な方法で周知を図るようにする。（山本正伸理事）

Announcement

2020 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2020 年度受賞候補者選考委員会
委員長 三瓶 良和

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、2020 年度同賞選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記を参照のうえご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、書留（簡易書留で可）で郵送してください。（下記の「1）候補者の履歴」を除いて、同内容のものを電子メールでも送付してください）

- 1）候補者の履歴（大学卒業以降の学歴、職歴、その他）
- 2）推薦の対象となる研究題目および推薦理由
- 3）研究業績目録
- 4）推薦の対象となる主要な論文 10 編（別刷またはそのコピー）
- 5）推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2020 年 6 月 1 日（月）（当日消印有効）

提出および問い合わせ先：〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060
島根大学 総合理工学部 地球科学科
三瓶 良和
電話 0852 32 6453、ファックス 0852 32 6469
E-mail : sampei@riko.shimane-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>
（日本有機地球化学会HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

2020 年度 研究奨励賞（田口賞）受賞候補者の募集

研究奨励賞（田口賞）2020年度受賞候補選考委員会
委員長 山中寿朗

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。
つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が1985年4月2日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。推薦の方法：A4サイズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDFファイルとしてE-mailに添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷りまたはコピー
- 4) 履歴書
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

*ご存知の通り、昨年度のように同一年度に複数名の受賞ということもあります。会員の皆様におかれましては、是非とも候補者ご推薦のほどお願い致します。

締め切り日：2020 年 5 月 29 日（金）（当日消印 有効）

提出及び問い合わせ先：〒108-8477 東京海洋大学海洋資源環境学部門 山中寿朗

電話：03-5463-0600 ファックス（電話に同じ）：03-5463-0600 E-mail：

t.yamanaka@kaiyodai.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>（日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

ROG 35 巻 1 号が WEB 公開。 ROG 36 巻へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry
編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、WEB 公開および冊子を発行しております。2019 年 12 月 20 日に ROG Vol.35, No.1 が WEB 公開され、No.2 を含めて Vol.35 が 2019 年 12 月末に発行される予定です。また、ROG Vol.35 の冊子を 2019 年 2 月頃に本学会会員の皆様の下に郵送にてお届けできると思います。Vol.35 (2019 年巻) は複数を刊行しますが、この数年は投稿された論文が少ないために一つの号の論文数が減少しております。ROG は会員皆様の論文投稿で成り立っておりますので、積極的なご投稿をどうぞよろしくお願いいたします。ROG Vol. 36 (2020 年巻) への論文投稿は、すでに受け付け体制にあります。ROG Vol.36, No. 1 は 2020 年 9~10 月頃、No. 2 以降は 2020 年 12 月に WEB 公開する予定で進めております。冊子体はこれまでと同様に 12 月頃の発行を予定しております。重ねて申し上げますが、皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページ、または ROG Vol.35 の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域の**ボトムアップ**をより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

北海道大学 大学院理学院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記

新年明けましておめでとうございます。今年度より編集委員長となりました。より良いニュースをお届けできるよう頑張っていきたいと思います。皆様からのご寄稿をお待ちしております。(金) 明けましておめでとうございます。今年度より編集を担当させて頂くことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。(中) 明けましておめでとうございます。今年度より金子さん、中田さんと一緒に編集を担当させて頂くことになりました。皆さまからの楽しいニュースをお待ちしております。これからどうぞよろしくお願い致します。(菅)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩
〒819-0395 福岡市西区元岡744 (ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529)
九州大学 大学院理学院地球惑星科学部門 & 惑星微量有機化合物研究センター
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野
事務局長 力石 嘉人
Phone : 011-706-5472 (直通)
E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀 (産業技術総合研究所)、中田 亮一 (海洋研究開発機構)、
菅原 春菜 (宇宙航空研究開発機構) :
e-mail: rog_nl@ogeochem.jp